復活節第５主日礼拝説教「霊感なし、霊視なしでも霊は来る」予稿
日本基督教団石神井教会　2024年4月28日

【旧約聖書日課】エゼキエル書　36章24～28節

24わたしはお前たちを国々の間から取り、すべての地から集め、お前たちの土地
に導き入れる。
25わたしが清い水をお前たちの上に振りかけるとき、お前たちは清められる。
わたしはお前たちを、すべての汚れとすべての偶像から清める。26わたしはお前
たちに新しい心を与え、お前たちの中に新しい霊を置く。わたしはお前たちの体
から石の心を取り除き、肉の心を与える。27また、わたしの霊をお前たちの中に
置き、わたしの掟に従って歩ませ、わたしの裁きを守り行わせる。28お前たちは、
わたしが先祖に与えた地に住むようになる。お前たちはわたしの民となりわたし
はお前たちの神となる。

【使徒書日課】ガラテヤの信徒への手紙　5章13～25節

13兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、こ
の自由を、肉に罪を犯させる機会とせずに、愛によって互いに仕えなさい。14律
法全体は、「隣人を自分のように愛しなさい」という一句によって全うされるか
らです。15だが、互いにかみ合い、共食いしているのなら、互いに滅ぼされない
ように注意しなさい。
16わたしが言いたいのは、こういうことです。霊の導きに従って歩みなさい。
そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。17肉の望む
ところは、霊に反し、霊の望むところは、肉に反するからです。肉と霊とが対立
し合っているので、あなたがたは、自分のしたいと思うことができないのです。
18しかし、霊に導かれているなら、あなたがたは、律法の下にはいません。19肉
の業は明らかです。それは、姦淫、わいせつ、好色、20偶像礼拝、魔術、敵意、
争い、そねみ、怒り、利己心、不和、仲間争い、21ねたみ、泥酔、酒宴、その他
このたぐいのものです。以前言っておいたように、ここでも前もって言いますが、
このようなことを行う者は、神の国を受け継ぐことはできません。22これに対し
て、霊の結ぶ実は愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、23柔和、節
制です。これらを禁じる掟はありません。24キリスト・イエスのものとなった人
たちは、肉を欲情や欲望もろとも十字架につけてしまったのです。25わたしたち
は、霊の導きに従って生きているなら、霊の導きに従ってまた前進しましょう。

【福音書日課】ヨハネによる福音書　15章18～27節

18「世があなたがたを憎むなら、あなたがたを憎む前にわたしを憎んでいたこ
とを覚えなさい。19あなたがたが世に属していたなら、世はあなたがたを身内と

して愛したはずである。だが、あなたがたは世に属していない。わたしがあなたがたを世から選び出した。だから、世はあなたがたを憎むのである。20『僕は主人にまさりはしない』と、わたしが言った言葉を思い出しなさい。人々がわたしを迫害したのであれば、あなたがたをも迫害するだろう。わたしの言葉を守ったのであれば、あなたがたの言葉をも守るだろう。21しかし人々は、わたしの名のゆえに、これらのことをみな、あなたがたにするようになる。わたしをお遣わしになった方を知らないからである。22わたしが来て彼らに話さなかったなら、彼らに罪はなかったであろう。だが、今は、彼らは自分の罪について弁解の余地がない。23わたしを憎む者は、わたしの父をも憎んでいる。24だれも行ったことのない業を、わたしが彼らの間で行わなかったなら、彼らに罪はなかったであろう。だが今は、その業を見たうえで、わたしとわたしの父を憎んでいる。25しかし、それは、『人々は理由もなく、わたしを憎んだ』と、彼らの律法に書いてある言葉が実現するためである。

26わたしが父のもとからあなたがたに遣わそうとしている弁護者、すなわち、父のもとから出る真理の霊が来るとき、その方がわたしについて証しをなさるはずである。27あなたがたも、初めからわたしと一緒にいたのだから、証しをするのである。

真理の霊が来るとき【こども説教のために】

最後の晩餐の後、弟子たちは皆、主イエスを見放してしまいましたが、十字架で死んで三日目にご復活なさった主イエスは、弟子たちの間に現れてくださいました。弟子たちを愛し抜いてくださった主イエスは、死んでもなお、弟子たちを愛してくださったのです。弟子たちは、「**互いに愛し合いなさい**」（ヨハネ 15:12）とお教えくださった主イエスが、今も自分たちを愛してくださっていることを、はっきりと知るようになったのです。

ご復活の主イエスは、弟子たちにお告げになりました、「**父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす**」（同 20:21）。世界に出て行くようにと、弟子たちを促されたのです。主イエスは、すべての人を愛するという父なる神の御心によって、世界においでくださったのです。弟子たちは、その主イエスの愛に応えましたが、すべての人が応じたわけではありませんでした。かえって主イエスを憎んだ者もあったのです。御父の愛をご存じだった主イエスでさえ、世の人々に憎まれたのです。弟子たちが出て行ったときには、どんなに愛を示しても、もっとひどく憎まれることがあるのではないでしょうか。それでも、主イエスは、弟子たちが世界に出て行くようにと促されました、「**聖霊を受けなさい**」（同 20:22）とおっしゃって。神からの霊を受ければ、弟子たちも恐れることなく勇気をもって、世界に出て行き、すべての人を愛して生きることができるようになるでしょう。

自由を得るために召し出された

先週、わたしは、ある方から転入会を願われる書類をお預かりしました。70 年以上前にカトリック教会で洗礼を受けられた方で、ご家族は石神井教会員です。長く教会生活からは離れていらしたとのことですが、人生の終わりをご家族と同じ教会の信者として過ごすことを願われたのです。長い人生を歩んで来られた方のこのようなご決断は、わたしたちにとっても大きな励ましを与えられることです。

ちょうど 10 年前、前任地教会時代ですが、聖霊降臨の祝いの日に洗礼を受けられた高齢の女性がいらっしゃいました。その女性 T さんは、その 4 年前にご夫君を看取られていましたが、わたしもその看取りの日々をご一緒に歩ませていただいていました。ご夫君は、亡くなる半年前のイースターに洗礼を受けられていました。ご夫君は、洗礼を受ける希望を持って教会においでくださっていましたが、なかなか洗礼志願を正式に出すに至られないまま何年も過ごされていました。足に麻痺がおありだったので、いつも T さんが付き添っていましたが、その気性の荒さに T さんはいつも辟易とされているご様子でした。そのご夫君の気性に触れていた T さんには、ご夫君の信仰が全く理解できないものでした。ところが、そのご夫君が、洗礼をお受けになられたときから人が変わったようになられたというのです。それまで T さんに何かしてもらっても、感謝するどころか腹を立ててばかりだったご夫君が、洗礼を受けられてからは、まったく穏やかになられ、何事につけ T さんに「ありがとう」とおっしゃるようになられたというのです。ご夫君が亡くなられるまでの半年の日々は、T さんにとって、それまでご夫君との間にあったわだかまりをすべて赦すことのできるときだったと、ご葬儀に際しておっしゃられるほどでした。それから 4 年後、T さんは、ご自身の人生の終わりを、ご夫君と同じ信仰を得て過ごしたいと、洗礼を決意されたのです。T さんも、それから一年経つことなく、主の身許に行かれました。

「**兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです**」という使徒パウロの言葉は、本当です。どういうわけか教会に導かれ、信仰者の交わりに加えられ、洗礼の恵みにあずかる決心をも与えられていくとき、わたしたちは皆、古い自分から自由にされ、新しくされているのです。自分自身でどれほど自覚があるかは、わかりません。けれども、自覚がなくても、わたしたちは、確かに変えられてきました。洗礼式の瞬間ではないかもしれませんが、その過程を経て、変えられてきたのです。古い自分から自由にされた者へと、変えられてきたのです。古い自分が死に、新しい命に生きるようになるのです。洗礼は、確かに、わたしたちが古い自分から自由にされ、新しい命の交わりへと向かわされていることの、しるしなのです。

「新しい霊を置く」

福音書で、主イエスは「**わたしがあなたがたを世から選び出した**」とおっしゃっています。それは、わたしたちが何か特権を与えられるためではありません。「**互いに愛し合いなさい**」という教えを、主に倣って、世の人々の間に出て行って実践するためです。確かにそれは、神から一つの使命を与えられて生きるようになる、ということなのでしょう。

けれども、そうだからと言って、わたしたちは、あまり気負い過ぎるべきではありません。批判をするつもりはありませんが、キリスト者たちの中には、神からの使命を帯びていることを自負するあまり、世界に対して、隣人に対して、信仰の家族に対してさえ、「**互いに愛し合いなさい**」という教えとは真逆の振る舞いをしてしまっている人々がいるのです。あの弟子のシモン・ペトロも、主イエスに忠実であろうとするあまり、人々が主イエスを捕えに来たとき、大祭司の手下の一人に剣で**打ってかかり、その右の耳を切り落としてしまう**という暴挙に出てしまったのです(ヨハネ18:10)。ペトロは、主イエスに「剣をさやに納めなさい」とたしなめられました。わたしたちも、うっかりすると、ペトロと同じように行動してしまう恐れがあるのです。

主イエスは、そのようなわたしたちに、「**聖霊を受けなさい**」と言われたのです。**父のもとから出る真理の霊が来る**のを待ちなさい、と言われたのです。それは、何も新しいことではありません。いにしえの預言者も、主の言葉を告げていたのです、「**わたしはお前たちに新しい心を与え、お前たちの中に新しい霊を置く**」と。

ご復活の主と出会った弟子たちは、聖霊を待ちました。**心を合わせて熱心に祈って**（使徒 1:14)、待ちました。聖霊を探しに出かけるのでもなく、聖霊について議論をしたのでもありません。静かに、待ったのです。それは、御父のもとから来て与えられるという聖霊を受け入れるための、自分の中の一部を空けるためだったのではないでしょうか。自分の中に充満している「古い自分」を取り出して、一部を明け渡すためだったのではないでしょうか。

わたしたちには、自分の中で空けられた一部、スペースが必要なのです。明け渡されたところに、新しい命を迎えるためです。そこで、「互いに愛し合いなさい」という主の御言葉が響き始めるのです。そこに、わたしたちの愛すべきお方をお迎えし、また、わたしたちの愛すべき人を迎え入れるのです。そのためのスペースが必要です。聖霊に明け渡す部屋が、わたしたちの内に必要です。ほんの少し、その部屋を空けることができれば、聖霊をお迎えすることができるでしょう。

聖霊を迎える備えをいたしましょう。互いに愛し合うために、すべての人を受け入れるために、聖霊を迎える場所を空けてお待ちしましょう。